

保育現場における季節の園行事について -保育学生の体験調査から-

著者：綾野鈴子¹・上田陽子²・丸田愛子³・長谷川麻実子⁴

所属：¹駒沢女子短期大学・²鎌倉女子大学短期大学部・³鹿児島国際大学・⁴鎌倉女子大学幼稚部

英文タイトル：Seasonal Events in Early Childhood Education

-from a Survey of Early Childhood Education Students' Experiences -

英文著者名：Suzuko.AYANO¹ Yoko.UEDA² Aiko.MARUTA³

Mamiko.HASEGAWA⁴

英文所属：¹Komazawa Women's Junior College ²Kamakura Women's University
Junior College ³The International University of Kagoshima ⁴Kamakura
Women's University Kindergarten

要旨：

本研究は、保育・幼児教育を学ぶ学生を対象に、季節に応じた文化的な園行事に関する印象の特徴と理由を調査し、教育的意義と養成の課題を検討することを目的とした。その結果、周年行事は印象に残る一方で、年中行事は印象に残りにくいことが分かった。特に「五感を伴う直接体験（経験）」や「周囲の人との関わり」、「象徴的な教材（モノ）」との関わりが行事により印象を与え、幼児の主体性が発揮されることが示唆された。また、地域文化の継承の場としての園行事の在り方が問われていることが明らかとなった。保育者として特に伝えたい・経験してほしい行事は、周年行事に偏る傾向がある一方、季節感や伝統文化の継承を重視する教育的視点も確認された。子どもと共に「やりがい」を感じる持続可能な教育的価値ある季節の園行事の実現のために、今後の養成における課題として、「子ども主体の行事」を具体的に構想できる資質を養うことが重要であることがわかった。

キーワード：季節の園行事、直接体験、教育的意義、保育者養成

1. はじめに

行事は子どもの成長を促す重要な教育的機会と位置付けられており、保育・幼児教育に関する施設では各季節に応じて行われている。平成29年告示の「幼稚園教育要領」¹⁾、及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」²⁾では、「行事の指導に当たっては、幼稚園（幼保連携型認定こども園）生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児（園児）が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的（教育及び保育における）価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。」と記されており、さらに「解説」³⁾⁴⁾では、子どもが通常とは異なる体験を通して自己や他者の新たな一面に気付く貴重な機会であることが述べられている。

また、平成29年告示の「幼稚園教育要領」⁵⁾、「保育所保育指針」⁶⁾、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」⁷⁾（以下「3要領・指針」とする）における領域「環境」の1歳以上3歳未満児の内容（6）では、「近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。」、3歳以上児の内容（6）では、「日常生活の中で我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」と示されている。さらに「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」⁸⁾では、1歳以上3歳未満児は、地域との関わりのきっかけとなること、3歳以上児では行事の由来について興味を持つことや、日本の文化や伝統的な行事に触れることの重要性が示されている。このように、行事は保育内容の一部として重要な役割があることを確認することができるが、筆者らの調査では、内容や方法、留意事項等について具体的に示された指針等は確認することができなかった。

行事に関する先行研究では、青戸（2019）⁹⁾が、保育・教育現場における行事活動が子どもの発達や学びに果たす意義について保育・教育者を対象にアンケートを行い、行事の意義として「自己表現力と対人関係能力の育成」「伝統文化への接触」「集団生活を通じた学びの深化」が抽出されたことを報告している。この結果から、行事活動を適切に保育に取り入れることで、子どもの成長をより豊かにする可能性や意義があると捉えていることが示された。横山ら（2015）¹⁰⁾は、保育の質の向上を図ることを目的として、4歳児の育ちの特徴と1年間の保育記録を考察し、運動会やこま遊びといった子どもの成長の節目の活動を重視していること、技能系の遊びに関する教育課程の編成の重要性を示した。

以上、「3要領・指針」¹¹⁾では行事の役割が示され、先行研究においても、行事を通じた子どもの育ちや適切な行事のあり方が報告されている。このように行事の重要性が報告されている一方で、行事に対する保育者の負担感に関しても調査がなされている。坂井ら（2017）¹²⁾による公立保育所の正規職員に対する調査では、離職意思に影響する要因のうち、「行事の準備」「行事の企画」「個々の子どもの記録」等の項目を含む「園やクラスの企画・事務」に対しての困難感が重大な要因であることが示された。

「東京都保育士実態調査報告書」（2023）¹³⁾では、保育士が「仕事の中で負担に感じて

いること」を調査し、その中で、「行事（準備含む）」が最も高かった（62.8%）ことを報告している。宮本ら（2024）¹⁴⁾が「行事に対する業務負担感」を比較した研究では、特に経験年数が10年未満の20代の若年保育者は、行事に対する心理的負担が大きい傾向がみられるものの、同時に行事を通して仕事の喜びや達成感を感じやすく、「やりがい」を認識していることも明らかとなっている。行事は、保育者にとって業務および心理的負担となっている反面、保育者としての充実感や成長実感の機会となり得る二側面を有していることが示唆される。

つまり行事は、保育内容の一部として重要な役割を持つものであり、教育的機会となるが、実施に関する具体的な指針等は確認できず、また保育者にとっては負担感がありつつも、一方で若手保育者はやりがいも感じているというジレンマを抱えていると言える。こうした背景を踏まえ、保育者として勤務経験のある筆者らは、持続可能な園行事のあり方について課題意識をもち、まず保育者養成段階における適切な指導が不可欠であると考えた。

そこで、予備調査として「行事に対する考え」に関して学生を対象にインタビューを実施したところ、「行事は子どもにとって学びがあることは、授業や実習を通して分かったが、行事の個別具体については理解できていない」という意見があった。学生を対象とした調査に関しては、足立（2014）¹⁵⁾が行事と子どもの成長に関して三段階に整理し、この三段階が揃う行事が子どもの成長に影響を与える可能性を考察している。前田（2025）¹⁶⁾は行事の整理と行事を経験した時の学生の気持ちを考察した。このように先行研究において、行事と子どもの成長や心情に関して考察されているが、本研究では季節の園行事全般を対象として更に調査を進め、季節の園行事に対する印象の特徴と養成における課題の整理を探究する。本研究の目的は、学生の印象に残る季節の園行事、また学生が子どもに伝えたい・経験してほしいと考える季節の園行事の特徴を明らかにし、分類および分析することで、教育的意義と養成における課題について明らかにすることである。

本研究における行事の定義は、単なる当日のイベントとして考えるのではなく、「日常の保育の延長線上に位置づくものであり、かつ生活に変化や潤いを与える機会であること、その過程を通して子どもの主体的な育ちと文化の継承を育む教育的価値のある活動」とする。園行事の種類は多岐にわたるものであるが、先に述べたとおり、「3要領・指針」¹⁷⁾において季節や文化の側面から示されていることから、保育施設の年間行事を精査した上で、本調査では季節に応じた文化的な行事を対象とし、月の定例行事（誕生会等）は対象としないこととする。具体的には、入園式・始業式、春の遠足、端午の節句（こどもの日）、母の日、父の日、七夕、夏祭り、お盆、十五夜、敬老の日、運動会、七五三、勤労感謝の日、クリスマス、発表会（音楽や劇など）、餅つき、正月行事、七草の節句、節分、ひな祭り、お花見、卒園式・修了式の計22種類である。更に「その他」の項目を設けた。

2. 方法

(1) 調査対象者

大学・短期大学に在籍する保育・幼児教育を学ぶ学生を調査対象とした。研究協力者リクルートのため、筆者らの所属する大学・短期大学、及び非常勤講師として勤務する大学の学生に対して、自由意思での調査参加を呼び掛けた。アンケート対象学生 519 名、回答者数 378 名、回収率・有効回答率は 72.8%であった。

(2) 調査方法

調査は 2025 年 12 月 1 日から 18 日に実施した。調査依頼時に、研究の目的、方法、結果の報告方法等について、及び調査データの取扱いに関しては研究代表者のもとに厳重に保管され統計的に処理し、個人のプライバシーの保護については十分配慮すること、調査への協力は任意であり授業評価等には影響がないこと、アンケート調査への回答をもって、本研究への協力について同意されたこととみなされること、をデータと口頭で説明した。アンケートの実施及び回答の回収は、WEB (Google フォーム) を使用して実施した。

(3) 調査内容

本調査では、個人属性として「所属 (大学・短期大学)」、「出身園の種別」、「出身園の地域」について回答を求めた。調査内容は、就学前に「①印象に残っている行事」、「②印象に残っている行事を選んだ理由」、「③園で実施された地域特有の行事」、「④保育者になった時に、あなたが特に子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事」、「⑤保育者になった時に、あなたが特に子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事を選んだ理由」である。①④においては、選択式 (複数回答可) で経験したものをチェックする方法で、②③⑤においては、自由記述とした。

(4) 分析方法

選択式 (複数回答可) で得られた項目①④については、まず選択頻度・記述内容に基づく量的分析を行い、全体像を把握する。②③⑤の自由記述の結果については、Text Mining (KH Coder)、による語の出現頻度と共起ネットワークによる関係図を用いて考察した。数量的な回答は、統計ソフト Excel を使って処理をした。

(5) 倫理的配慮

本研究は、2025 年 11 月 26 日に筆者所属先の駒沢女子大学・短期大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (承認番号 2025 - 0028)。調査実施においては、WEB (Google フォーム) の冒頭に研究の目的、方法、結果の報告方法、調査データの取扱い、プライバシーの保護、任意協力について記載した。本研究ではアンケート調査への回答によって対象者が調査に同意したものとみなした。

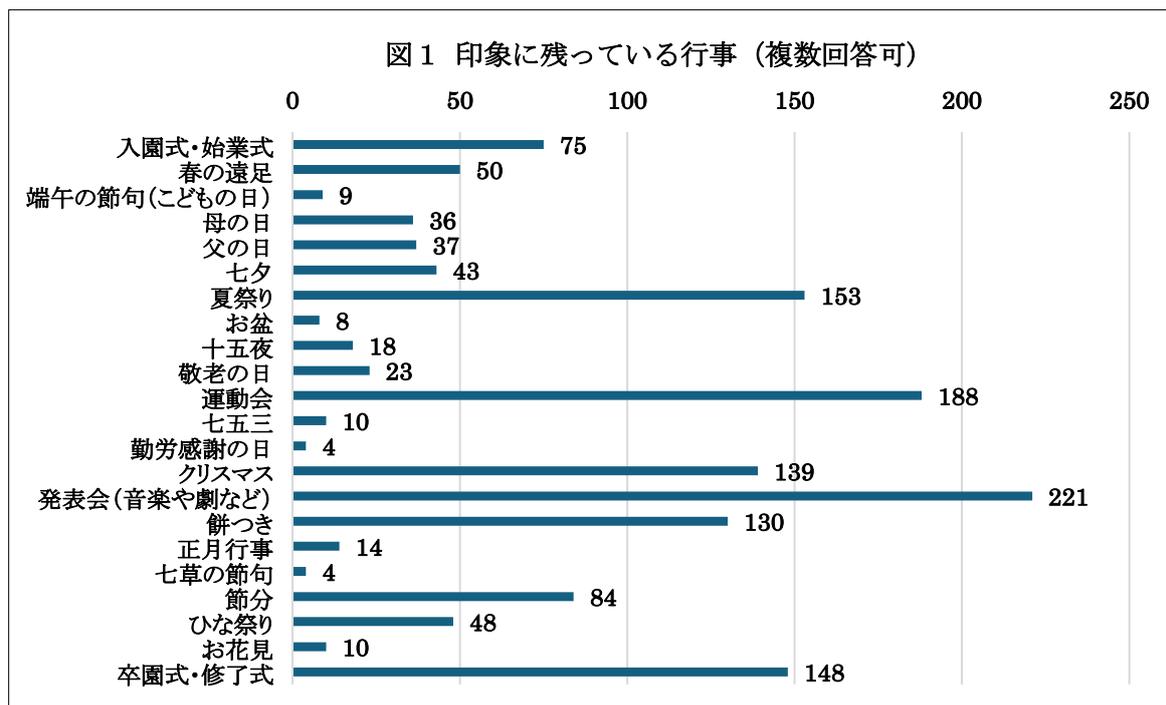
3. 結果と考察

(1) 回答者の属性分布について

所属は、大学 263 名 (69.6%)、短期大学 115 名 (30.4%) であった。出身園の種別は、幼稚園 241 名 (63.8%)、保育所 153 名 (40.5%)、その他 7 名 (1.9%) であった。出身園の地域は、関東地域 194 名 (51.3%)、九州の一部地域 144 名 (38.0%)、その他の地域 40 名 (10.5%) であった。

(2) 印象に残っている行事

印象に残った行事の結果は、図 1 の通りである。選択された総行事数は、1,452 であった。その他については、季節の園行事ではない行事であったため、調査対象から除外した。



上位を占めるものとして、最も多い行事が「発表会」221 (58.5%)、次に、「運動会」188 (49.7%) であった。印象に残った行事の調査に関しては、足立 (2014)¹⁸⁾ や前田 (2025)¹⁹⁾ からも実施しており、「発表会」、「運動会」が上位であったことを報告している。これらはいわゆる周年行事であり、保育・幼児教育を学ぶ学生となった現時点において、印象に残る傾向が高いことが示唆される。続いて「夏祭り」153 (40.5%)、「卒園式・修了式」148 (39.2%)、「クリスマス」139 (36.8%)、「餅つき」130 (34.4%) であり、年中行事と周年行事があげられた。その他、年中行事に関しては、上位であった餅つきを除き、「節分」84 (22.2%)、「春の遠足」50 (13.2%)、「十五夜」18 (4.8%)、「正月行事」14 (3.7%)、「七五三」10 (2.6%)、「お花見」10 (2.6%)、「お盆」8 (2.1%) で、2割未満が多くあった。季節の節目とされる節句は、「ひな祭り」48 (12.7%)、「七夕」43 (11.4%)、「端午の節句」9 (2.4%)、「七草の節句」4 (1.1%)、であり、1割程度以下となっている。記念日に関しては、「母の日」36 (9.5%)、「父の日」37 (9.8%)、「敬老の日」23 (6.1%)、「勤労感謝の日」4 (1.1%) であり、いずれも1割未満という結果になった。本調査では、周年行事は印象に残りやすく、節句や記念日を含む年

中行事に関しては、印象に残りにくい傾向があることが分かった。

(3) 印象に残っている行事を選んだ理由

印象に残っている行事を選んだ理由の自由記述を集計し、語の出現を確認し、類似概念をもとに分類したところ、「経験」、「人との関わり」、「物(教材)との関わり」「感情・気持ち」の категорияに分類された。印象に残っている行事を選んだ理由を、4つの categoria を用いて分析することを通して、行事における具体的な体験や育ち及び教育的意義を考察する。

1) 「経験」の categoria

総抽出語は 380 語である。上位は、「行う(する)」55 語 (14.5%)、「食べる」32 語 (8.4%)、「踊る」28 語 (7.4%)、「してもらう」24 語 (6.3%)、「餅をつく」22 語 (5.8%)、「練習する」・「劇をする」・「製作する(作る)」20 語 (5.3%)、「発表する」17 語 (4.5%)、「来てもらう」16 語 (4.2%) の順であり、表 1 にまとめた。頻度 2 回以下のものは削除した。

上位に「食べる」(32 語)、「踊る」(28 語)、「餅をつく」(22 語)といった、味覚・触覚その他、五感を伴う活動が挙げられていた。学生の記述には「美味しいものが食べられて楽しかった」「自分で餅をついて食べたり、体験したりしたことが印象に残った」「浴衣をみんなで着て盆踊りを踊った」「夏祭りに鉢巻きを巻いてみんなで踊るのが定番だった」などがみられた。行事が単なる「視覚的なイベント」ではなく、身体全体で経験する活動(=直接体験)として強く記憶に残ることが分かった。これは、「3 要領・指針」²⁰⁾が示す「環境」や「表現」の領域における、「五感を働かせ周囲の事象に興味を持つ」経験を具現化するものである。また、「食べる」「餅をつく」といった「食」に関する記述が多いことから、行事と「食」が関連付けられていると、幼児の印象に定着しやすくなるということも推察された。さらに、「芋ほりに行く」「郵便局へ手紙を出しに行く」「高校の保育科の展示を見に行く」など「行く」(8

表 1 印象に残った行事を選んだ理由
「経験」の categoria

抽出語	頻度
行う(する)	55
食べる	32
踊る	28
してもらう	24
餅をつく	22
練習する	20
劇をする	20
製作する(作る)	20
発表する	17
来てもらう	16
泣く	9
(浴衣・衣装を)着る	9
行く	8
頑張る	7
協力する	7
自分たちで行う	6
初めて体験・経験する	5
歌う	5
楽器を演奏する	5
豆をまく	5
泊まる	5
離れる	5
準備する	4
創り上げる	4
褒めてもらう	4
プレゼントする	4
遊ぶ	3
調理する	3
セリフを覚える	3

語) という語が少数であるが抽出され、これは、園内という日常の枠組みを越え、地域社会や自然環境へと自ら移動し、本物に触れる「直接体験」も印象に残りやすいことが推察された。

「練習する」(20 語) や「製作する」(20 語) といった記述も多く挙げられており、学生の記述には、「劇の振り付けを練習した」「発表会はたくさん練習したことが思い出として残っている」「運動会で頑張って練習したダンスやリレーをお母さん、お父さんに見てもらえたことが嬉しかった」「鼓笛隊の練習を頑張った」「長い時間練習し本番に臨んだ」「沢山の時間を要して製作活動を行った」「行事の作品を作った」などがみられた。これは、行事が当日という点ではなく一定期間の積み重ねを伴う線としての活動であることを示している。足立 (2014) ²¹⁾ によれば、行事には「当日までの過程 (第 1 段階: 第 1 次成長)」が存在し、そこでの試行錯誤や練習、役割の遂行が、自立心や協調性といった社会性の獲得を支える実体であるとしている。また、「練習する」という言葉が多く挙げられたことから、行事が日常の「遊び」の延長線上ではなく、日常と乖離が広い「特別な活動」として位置付けられている側面があるということも考えられた。さらに、「発表する」(17 語)、「劇をする」(20 語) といった記述も多く、行事が「見せる場」としての性格が強いということにも繋がり、出来栄を重視する「見せる保育」になっている可能性が示唆された。一方で、「協力する」(7 語)「自分たちで行う」(6 語) や「創り上げる」(4 語) といった相互主体的な関わりを示す記述が少数ではあるが抽出されていることは、園行事が単なる保育者主導の活動に終始せず、幼児が「共通の目的のために友達と関わる」という共同的な学びの場として機能している側面もあるということが考えられる。

「行う」(55 語) という自発的な活動の一方で、「してもらおう」(24 語)、「来てもらおう」(16 語) といった、他者からの援助や承認を受ける経験も高い頻度で見られた。学生の記述には、「行う」については、「劇を行った」「組体操を行った」「カレー作りを行った」「発表会で花束を渡す役を行った」「餅つきの司会を行った」などが、「してもらおう」、「来てもらおう」については、「先生に衣装を作ってもらった」「先生たちのサポートが手厚かった」「先生が屋台を出してくれた」「家族が発表会を見に来てくれた」「親に来てもらって一緒に種目に出た」「お父さんが来てくれて一緒に餅をついた」などがみられた。行事は、幼児が「自ら主体となって動く場」であると同時に、「頑張った姿を認めてもらいたいという欲求を満たす場」や、「周囲から大切にされている実感を得る場」としての側面も持っていることが推察された。

2) 「人との関わり」の 카테고리

総抽出語は 198 語である。上位は、「先生」34 語 (17.2%)、「親」28 語 (14.1%)、「自分」19 語 (9.6%)、「友達」15 語 (7.6%)、「家族」10 語 (5.1%)、「保護者」9 語 (4.5%)、「クラス」8 語 (4.0%)、「子ども」・「祖父母」7 語 (3.5%)、「園長」6 語 (3.0%)、「お父さん」5 語 (2.5%) の順であり、表 2 にまとめた。頻度 2 回以下の

ものは削除した。

分析の結果、「先生」(34語)、「親」(28語)、「自分」(19語)、の出現頻度が高かった。この結果から、行事は「保育者・保護者・子ども」の三者の深い関わりによって成立していることが示された。特に保護者に関連する「親」(28語)、「保護者」(9語)、「お父さん」(5語)、「お母さん」(3語)を合算すると45語に達し、最多となった。学生の記述には、「親との楽しい思い出があるから」「大好きな親が来てくれて嬉しかった」「親が園に来て一緒に行事をするから」「がんばって練習した劇や音楽を保護者に見せることも楽しかった」といった内容がみられた。これらは、日常の生活の場である園に保護者が訪れ体験を共有することや、保護者の前で自分の成果を発表した経験が記憶に強く刻まれ、保護者の存在を大きく意識していることがうかがえる。このことから、行事における家庭との結びつきは、筆者らの想定以上に強いものであることが示唆された。

「先生」(34語)、に関する学生の記述では、「餅つきの司会を先生がやっていた」「先生と一緒に餅をつくというのが新鮮で楽しかった」「先生が実際に鬼役となり行事を楽しんだから」といった内容がみられ、幼児が保育者の言動をよく注視していることがわかる。また、「先生が作ってくれた衣装(ドレス)で踊った」「先生たちが手作りで衣装や台本を作ってくれたのが嬉しかったから」という記述からは、行事の準備に携わる保育者の姿に幼児が敏感に気づき、それを肯定的に受け止めていることが推察される。さらに少数ではあるが、「園長」(6回)も抽出されおり、「園長先生がサンタや鬼に変装した」「園長先生と一緒にお餅をついてくれた」といった記述からは、普段とは異なる園長の姿が幼児に強い印象を与えたと考えられる。これらの結果は、幼児に関わる全ての職員が日常の保育のみならず、行事においても幼児と共に主体的に楽しみ同じ立場で関わる姿勢の重要性を示している。したがって、保育者のモデルとしての役割は極めて大きいと言える。

「自分」(19語)、に関する学生の記述は、「自分で餅をついて食べた」「自分たちがお雛様とお内裏様になって体験した」「自分の頑張りを発揮することができる機会だった」「自分たちが頑張ったことを保護者に見せる場」といった内容があり、主体的な経験が印象に残りやすいことが示された。一方で「友達」(15語)に関する記述には「友達と一緒にやった」「友達と楽しめた」「友達と協力した」「友達や先生と長い時間練習

表2 印象に残った行事を選んだ理由
「人との関わり」の 카테고리

抽出語	頻度
先生	34
親	28
自分	19
友達	15
家族	10
保護者	9
クラス	8
子ども	7
祖父母	7
園長	6
お父さん	5
他	4
学年	4
お母さん	3

を一緒にした」などがみられ、行事における個人の主体的な経験が、他者である友達の存在と密接に関わっていることが明らかとなった。また、「クラス」(8語)、「学年」(4語)に関する学生の記述に、「クラス皆でダンスを踊る」「クラス皆で協力して」「学年ごとにおなじテーマで」といった内容があり、集団として一つ目的を達成しようとする意識が反映されていると考えられる。その過程において、友達同士の多様な関わりが生じていたことが推察される。以上のことから、行事における記憶は、「自分」(19語)の主体的な経験だけではなく、「友達」(15語)「クラス」(8語)「学年」(4語)といった周囲の仲間との関わりと共に形成されていることが明らかとなった。

行事は友達と共に過ごすこと自体が主体的な活動へと繋がるという側面を有していると考えられる。さらに、主体的に行事へ取り組むためには、保護者や生活の基盤を共にする友達・保育者との関わりが支えとなっていることが示唆された。この結果は、行事が単なる活動ではなく、幼児を中心とした他者との相互作用の場であることを示している。それゆえ、保育者は友達と工夫したり協力したりする楽しさを十分に味わえるよう、多様な関わりが生まれる援助を行うことが重要であるといえる。

行事への取り組みにおいて、人との関わりが及ぼす影響は極めて大きい。したがって、行事の質や内容を追求するだけでなく、「人と人との関わり」がどのように生まれ、育まれるのかという視点を重視し、行事の構成や実施方法を検討することが肝要である。

3) 「物(教材)との関わり」の 카테고리

総抽出語は190語である。上位は、「鬼」26語(13.7%)、「サンタクロース」23語(12.1%)、「餅」22語(11.6%)、「写真」17語(8.9%)、「作品」10語(5.3%)、「キャラクター」9語(4.7%)、「プレゼント」・「劇」8語(4.2%)、「映像(ビデオ)」7語(3.7%)、「衣裳」・「役」・「浴衣」6語(3.2%)の順であり、表3にまとめた。頻度2回以下のものは削除した。

上位に「鬼」(26語)や「サンタクロース」(23語)、「餅」(22語)といった語がみられたことから、

表3 印象に残った行事を選んだ理由
「物(教材)との関わり」の 카테고리

抽出語	頻度
鬼	26
サンタクロース	23
餅	22
写真	17
作品	10
キャラクター	9
プレゼント	8
劇	8
映像(ビデオ)	7
衣裳	6
役	6
浴衣	6
手作り	5
お神輿	4
記録	4
お菓子	4
リレー	3
屋台	3
行事	3
折り紙	3
太鼓	3
ひな人形	3
クリスマス	3

象徴的な教材や存在が、行事の印象を決定づける強力な要素として幼児の記憶に刻まれていることが分かった。

また、「写真」(17語)や「映像」(7語)さらには自ら製作した「作品」(10語)といった記録に関連する媒体が多く挙げられた点が注目に値する。これらは、幼稚園教育要領²²⁾第1章総則第4-3指導計画の作成上の留意事項(6)にある「幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること」という指針を体現するものであり、これらの媒体が当日の直接体験を視覚的に「補完」し、事後の振り返りを支える重要な教材として機能している実態が示唆された。

しかし、一方で伝統的なモノ(正月用品、雛人形、鯉のぼり等)や地域の施設・資源の活用に関する言及は極めて少なかった。これは、幼保連携型認定こども園教育・保育要領²³⁾第1章総則2(3)指導計画作成上の留意事項、幼稚園教育要領²⁴⁾第1章総則第6幼稚園運営上の留意事項、及び保育所保育指針²⁵⁾第2章保育の内容 保育の実施に関しての留意すべき事項(3)家庭及び地域社会との連携において求められている「地域の自然、高齢者や異年齢の子ども等を含む人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用」し、「豊かな生活体験を得られるように工夫する」という方針に対し、現状の環境構成が特定の象徴的キャラクターやイベント性の高いモノに偏っている可能性や、地域社会との連携における教材活用の余地が残されているといえる。

以上のことから、園行事の計画においては、どのような「モノ＝教材」を介在させるかが子どもの経験の質を左右すると言える。今後は、象徴的な教材が持つインパクトを活かしつつ、ICTによる体験の「補完」と、伝統文化や地域資源の「直接体験」を効果的に織り交ぜた、より多層的な環境構成を検討していくことが重要であると言える。

4) 「感情・気持ち」の 카테고리

「感情・気持ち」に関する自由記述を抽出したところ 273語が抽出確認された。頻度1回のは削除した。

ポジティブな感情とネガティブな感情及

表4 印象に残った行事を選んだ理由
「感情・気持ち」の 카테고리

ポジティブ感情		ネガティブ感情	
抽出語	頻度	抽出語	頻度
楽しい	153	怖い	10
嬉しい	13	泣く	9
好き	11	悲しい	4
美味しい	8	緊張	3
ワクワク	7	悔しい	2
すごい	3	寂しい	2
感動	3	恥ずかしい	2
頑張る	3		
経験	3		
楽しむ	2		
新鮮	2		
達成	2		
面白い	2		

び捉えた感覚に関する記述が確認された（表4、表5）。ポジティブな感情が234語（85.7%）、ネガティブな感情が39語（14.3%）であった。印象に残った理由として、ポジティブな感情が多いことが明らかとなった「楽しい」が最も多く153語（65.4%）、「嬉しい」が13語（5.6%）、「好き」11語（4.7%）、「美味しい」8語（3.4%）、「ワクワク」7語（3.0%）であった。「楽しい」気持ちは保育活動において重要な要素であり、積極的な参加や当事者意識が育まれていることがうかがえる。「嬉しい・好き・美味しい」気持ちからは、喜びや満足感などの心の動きを読み取ることができる。一方で、「頑張る」3語（1.3%）、「達成」2語（0.9%）など、活動を通じた自己成長に関するポジティブな感情は少ないことが明らかとなった。幼稚園教育要領²⁶⁾第1章総則では、行事の指導に当たっては、幼児が行事に期待感を持ち、主体的に取り組んで、喜びや感動、さらには、達成感を味わうことができるように配慮する必要があることが述べられている。行事の取り組み過程を通して、幼児が主体性を発揮し、成長実感できるような実施方法の工夫が望まれる。

ネガティブな感情については、「怖い」が最も多く10語（25.6%）、「泣く」9語（23.1%）、他にも少数であるが、「悲しい」「緊張」などが確認された。「怖い」「泣く」については、節分行事での感情として述べられ、節分行事の鬼の存在は、ネガティブ感情として印象に残るケースがあることが分かった。「悲しい」は保護者との分離に関すること、「緊張」は発表に関する行事で確認された。これらの感情は、自分を守り、他者と乗り越える力を獲得する経験になっているのではないかと推察される。ネガティブな感情の体験も、保育者の受け止めにより、感情のコントロールを体感する機会となることが期待される。

足立（2014）²⁷⁾は、幼児期の行事に対する考えと振り返りに関する学生対象の調査で、印象に残っている行事の理由をカテゴリ抽出後、ポジティブ要因、ネガティブ要因、中立的要因の3つに大別し、8割以上の学生は肯定的な理由を回答、2割近い学生は否定的あるいは中立的な回答であったことを報告している。本調査においても、ポジティブな感情が8割であり、類似の結果が得られている。保育学生となった現段階では、行事に対してよい感情を持つ傾向が高いことが分かった。

行事を通して捉えた感覚については、「非日常」「特別感」「ほかの行事とは一味違う」「普段はできないことを体験」「いつもと違う」といった、いつもの園生活とは異なる体験に関する記述があった。前田（2025）²⁸⁾は、園行事の捉えに関して学生のアンケート分析をし、学生が取り上げた上位の行事に関する一考察として、非日常感によるものであると示唆している。本調査においても、行事での体験が、非日常感や特別感として学生の印象に残るケースがあることが分かった。更に本調査では、「大きなイベント」「豪華で充実」「大掛かり」「大々的」「凝っていた」「力を入れていた」など、行事の規模感や充実感に関する記述も確認された。行事は、幼児の自然な生活の流れに変化や潤いを与えるものであり、幼児は行事に参加し、それを楽しみ、いつもの幼稚

園生活とは異なる体験をすることができる(幼稚園教育要領²⁹⁾第1章総則)。行事内容の非日常感や特別感、規模感、充実感が、いつもの園生活とは異なる体験の一助となり得るのではないかと考察する。

(4) 園で実施されていた地域特有の行事

地域特有の行事に関して397の回答があった(図2)。

「特になし」が最も多く255(64.2%)であり、次に多いものが「地域の祭り」への参加57(14.4%)

で、踊りやお神輿を担いだとの記述が多くあった。その他は、地域特有の行事以外の園行事に関する記述が、85(21.4%)であり、外部施設訪問などの園行事の記載も多かった。「3要領・指針」³⁰⁾では、家庭や地域社会と連携する際に地域の自然や人材、行事や施設などの地域資源を活用することを示している。今回、「特になし」が6割を占めたこと、また地域行事以外の園行事の記載が多かったことを鑑みると、地域色のある行事の実施が少ない、或いは実施されていたとしても学生らの印象に残りにくいことが示唆された。地域への親しみ、地域文化の継承の観点からも、地域や子どもの実態に応じた形で実施されることが望まれる。

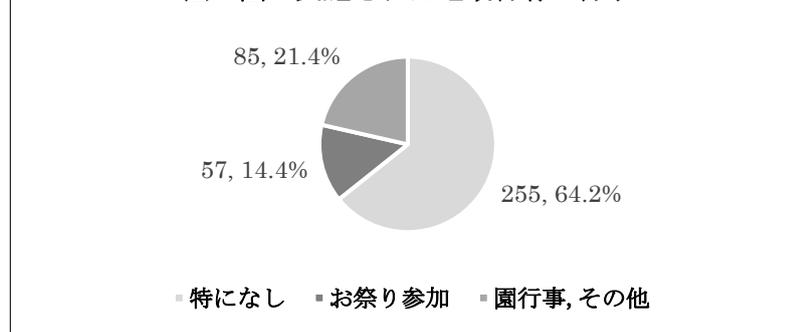
(5) 保育者になった時に、特に子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事

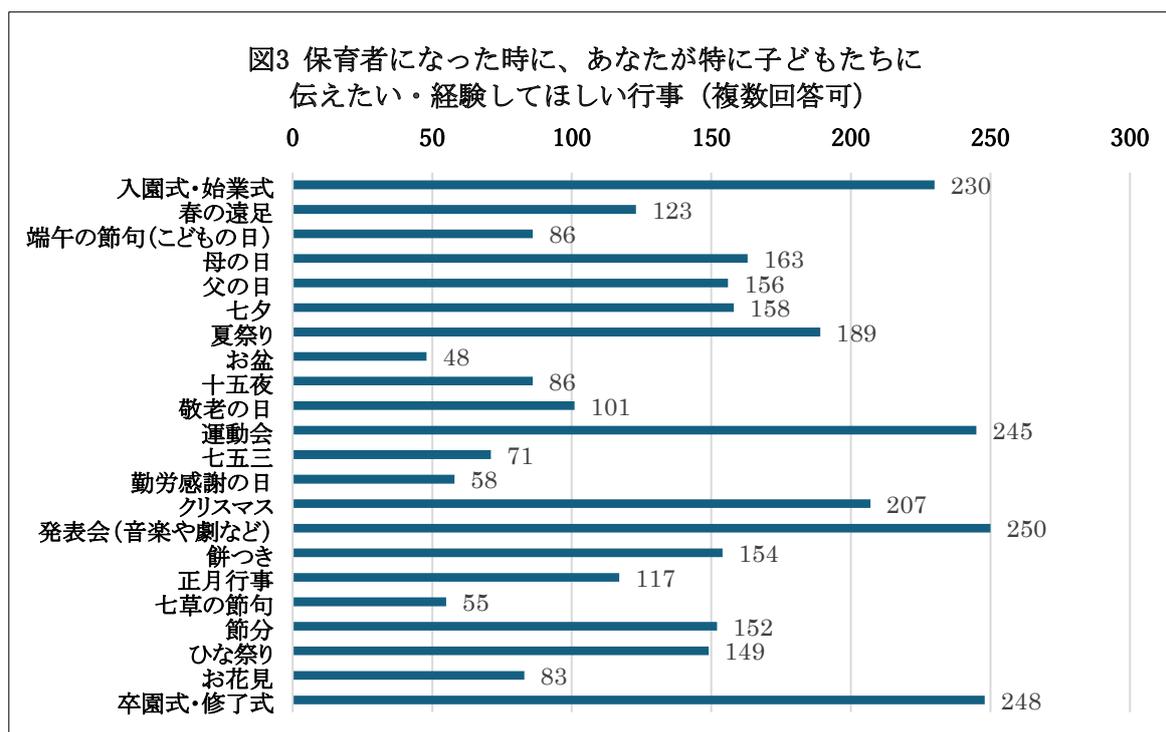
伝えたい・経験してほしい行事の結果は、図3の通りである。選択された総行事数は、3,129であった。その他については、季節の園行事ではない行事であったため、調査対象から除外した。

表5 感覚に関する学生の記述例 一部抜粋

親も来て夜まで開催していて非日常的でワクワクしたから。
夏祭りがお泊り保育の時に実施されていて、非日常で楽しかった。
サンタさんが来たり、プリンセスの役になったりと非日常体験をしたから。
お泊まり保育をしたこともよく覚えていて、自分たちでカレーをつくったり、友達と寝たりして、非日常的な体験ができて楽しかった。
家族も見に来てくれるため特別感があったから。
鬼が保育園に来てみんなで豆を投げて他の行事とは一味違って楽しかったから。
普段はできないことを体験することができたから。
親が園に来て、一緒に行事をするから。いつもと違う雰囲気だから。
他の行事より準備などがあって、大きな行事だったから。
入学卒業は大きなイベントだったからです。
クリスマスが豪華で充実していたから。
大掛かりで印象に残りやすかったから。
園外の場所を借りて大々的に行われていたから。
イベントの内容が凝っていて特に楽しかった記憶があるから。
園が力を入れていたと思うから。

図2 園で実施された地域特有の行事





先に述べた印象に残った行事数（図1）と比較して、1,677の増加、各行事の割合が伸びた。印象に残っているか否かに関わらず、園行事を子どもたちに伝えたい・経験してほしいと考えていることが分かった。

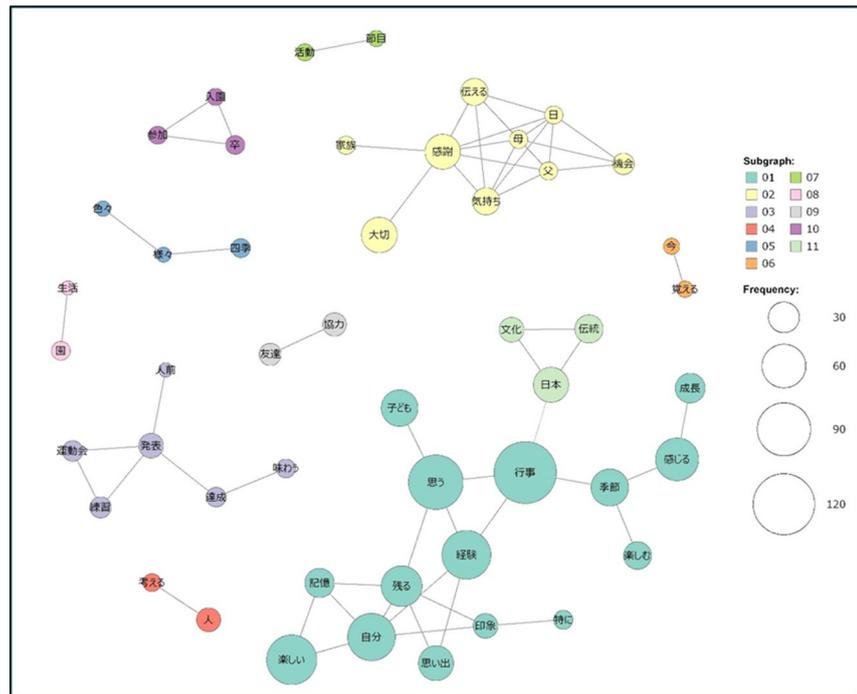
上位を占めるものとして最も多い行事が、「発表会」250（66.1%）、次に、「運動会」245（64.8%）であった。先に述べた印象に残った行事と比較して、同じ順位でありそれぞれ1割程度の増加がみられた。続いて、「卒園式・修了式」248（65.6%）、「入園式・始業式」230（60.8%）、「クリスマス」207（54.8%）、「夏祭り」189（50.0%）であった。このことから、周年行事については、子どもたちに伝えたい・経験してほしいと考える傾向が高いことが推察される。記念日に関しては、「母の日」163（43.1%）、「父の日」156（41.3%）、「敬老の日」101（26.7%）、「勤労感謝の日」58（15.3%）であり、印象に残った行事と比較して、母の日、父の日のいずれも3割程度の増加がみられた。年中行事に関しては「餅つき」154（40.7%）、「節分」152（40.2%）、「春の遠足」123（32.5%）、「十五夜」86（22.8%）、「正月行事」117（31.0%）、「お花見」83（22.0%）、「七五三」71（18.8%）、「お盆」48（12.7%）であった。節句は、「七夕」158（41.8%）、「ひな祭り」149（39.4%）、「端午の節句」86（22.8%）、「七草の節句」55（14.6%）であった。本調査では、周年行事に関しては伝えたい・経験してほしいという意識が高い傾向で、記念日や節句を含む年中行事に関しては、行事によって意識の高低があることが分かった。

（6）保育者になった時に特に子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事を選んだ理由

伝えたい・経験してほしい行事を選んだ理由の結果については、印象に残っている

理由と比較して記述内容が大まかであり、保育者としての考えを回答するにあたり、具体的なイメージが持てない学生がいることがうかがえた。本結果については、共起ネットワークを用いて関係性の視覚化を試みた(図4)。総抽出語は6,784語である。まず、行事に関して、「経験」76語、「自分」72語、

図4 保育者になった時に特に子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事を選んだ理由(自由記述)



「思い出」39語、「印象」19語、「残る」53語が関連深く、自分の経験や印象・思い出が、伝えたい・経験してほしい行事に関連していることが分かった。

次に、「季節」44語、「感じる」59語と「日本」39語、「伝統」25語、「文化」19語、について、季節感や伝統文化の継承が意識されていることが明らかとなった。また、「感謝」39語を軸に「父」10語「母」10語や「伝える」23語、「大切さ」40語といった語が出現し、「感謝」の気持ちを育むことの大切さを理解していることがうかがえる。

これらは印象に残った理由では殆ど出現しなかった語であり、保育者として子どもに育む教育的視点を持っていることがうかがえた。

4. まとめ

本研究では、学生の就学前における季節の園行事の経験実態を調査し、その教育的意義と養成における課題について検討した。

第一に、発表会や運動会といった周年行事が強く印象に残っている一方で、季節感や伝統文化の継承に関する年中行事は印象に残りにくいことが明らかになった。また、幼児期における行事の印象は、単一の要素ではなく、「身体活動を伴う直接体験(経験)」、「保護者や友達との相互作用(人)」、「象徴的な教材(モノ)」、そして「非日常感・特別感(感情)」といった要素が複合的に作用することで形成されていることが分かった。特に、五感を伴う直接体験や保護者や友達と関わるなどの情緒的な繋がり、象徴的な教材との関わりが、行事に対するよい印象として寄与し幼児の主体性が発揮

されることが示唆された。

第二に、現代の子どもを取り巻く環境の変化により、地域色のある行事の実施が少ない、あるいは実施されていたとしても学生らの印象に残りにくいことが示唆された。本調査においても、地域特有の行事を認識している学生は少なく、地域文化の継承の場としての園行事の在り方が問われている。

第三に、子どもたちに伝えたい・経験してほしい行事では、経験に基づく周年行事に偏る傾向があり、年中行事に関しては意識の高低があることが分かった。一方で季節感、伝統文化の継承、感謝の心の育成など、保育者として子どもに育む教育的視点を持っていることがうかがえた。

以上のことから、行事を日常の保育の延長線上に位置づけ、子ども主体の行事へと質的に向上させることが、子どもと共に「やりがい」を感じる持続可能な教育的価値ある季節の園行事の実現につながると考える。今後の保育者養成においては、学生自身の行事経験を捉え直し、行事の表面的な「実施」だけでなく、その背後にある本質的な意味理解を深める指導が不可欠である。行事を単なるイベントとして捉えるのではなく、当日に至るまでの「プロセスの重視」や、「地域資源の積極的な活用」、「子どもが主体となる行事づくり」を具体的に構想できる資質を養うことが重要であることが分かった。

謝辞

本研究におけるアンケートにご協力いただきました学生に感謝いたします。

《参考引用文献》

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領』2017
- (2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2017
- (3) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 2018
- (4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館(2018)
- (5) 前掲(1)
- (6) 厚生労働省『保育所保育指針』2017
- (7) 前掲(2)
- (8) 前掲(4)
- (9) 青戸泰子、菊地愛未、田邊資章、「保育・教育現場における行事活動の意義」人間環境学会紀要 第32号 2019, 1-11.
- (10) 横山真貴子、鎌田大雅、松本知子「保育における4歳児の育ちー1年間の保育記録を保育の質の向上につなぐ試み」次世代教員養成センター研究紀要 1 2015, 45-56.
- (11) 前掲(1)(2)(6)
- (12) 坂井敬子、山本睦。「保育士の離職意思に影響する 要因：業務困難感、昇進不希望、ならびに個人要因による検討」日本教育心理学会第59回総会発表論文集 2017, 320.
- (13) 東京都福祉保健局「東京都保育士実態調査報告書」2023
<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/r4hoikushichousa>
(閲覧 2025.12.25)
- (14) 宮本絢子、白神啓介「自治体の保育主管課の方針による保育・行事計画の見直しと保育士業務の業務負担感およびストレスの関連」日本家政学会誌 2024, Vol.75 No.4 147-157.
- (15) 足立里美「行事による子どもの成長の検討ー学生の幼児期の行事に対する考えと振り返りからー」岐阜聖徳学園大学紀要. 教育学部編 第53号 2014, 91-103.
- (16) 前田和代「保育内容「園行事」の捉え方に関するー考察ー学生のアンケート分析を通して」東京家政大学教職センター年報 第20号 2024, 58-67.
- (17) 前掲(1)(2)(6)
- (18) 前掲(15)
- (19) 前掲(16)
- (20) 前掲(1)(2)(6)
- (21) 前掲(15)
- (22) 前掲(1)

- (23) 前掲 (2)
- (24) 前掲 (1)
- (25) 前掲 (6)
- (26) 前掲 (1)
- (27) 前掲 (15)
- (28) 前掲 (16)
- (29) 前掲 (1)
- (30) 前掲 (1) (2) (6)